

書 評

太田 勇 著

『華人社会研究の視点 マレーシア・シンガポールの社会地理』

寄藤 昂・熊谷圭知・堀江俊一・太田陽子編集
古今書院 1998.5.12 362ページ

小 木 裕 文

本書の著者である故太田勇氏との出会いは、文部省重点領域研究『東アジア比較研究』（中嶋嶺雄代表）のG班「東南アジアの華人社会の変容」のメンバーとして共同研究に参加したのが縁であった。当時、シンガポール・マレーシアの華語文学、華語教育を研究していた評者が、華人社会研究の視点を広げることができたのは太田氏との出会いがきっかけであったといっても過言ではない。とりわけ、フィールド・ワークの方法論に疎い私に調査の方法論、視点の大切さ、ステレオタイプの危険性などを教えて下さった。太田氏とは国内での二年にわたる共同研究、そして国際学術研究でのシンガポール・マレーシアにおける二回の海外調査がある。この共同研究で太田氏から学んだものは多く、その一部は拙著『シンガポール・マレーシアの華人社会と教育変容』（光生館）に反映されている。

さて、古今書院から出版されたこの著書は1996年2月に白血病のため急逝された東洋大学教授太田勇氏が発表した論考を太田氏の妻であり、自然地理学者である太田陽子女史や友人研究者で構成される編集委員会がまとめたものである。太田氏は人文地理学の観点からシンガポール・マレーシアの華人社会の研究に取り組み、学会誌を中心に優れた研究成果を発表されてこられた。本書はこれらの学会誌、大学の研究報告書、雑誌などに

発表された論文を中心に再録編集したものであるので、構成の上で若干系統性に欠けている点もあるが、全体として、日本の東南アジア華人研究を一層発展させたハイレベルの研究書といえる。

本書の内容は下記の通りである。

まえがき

- 第 部 マレーシア・シンガポールの華人社会
 - 1章 華人社会研究の視点
 - 2章 華語教育と華人意識
 - 3章 華語社会の将来
 - 4章 華人のエスニック・アイデンティティ
 - 5章 言語環境からみた馬華文学
- 第 部 都市国家シンガポールと華人社会の変容
 - 6章 シンガポールは第三世界の都市か？
 - 7章 シンガポール・ジュロン工業団地の民族集団
 - 8章 マレーシア・シンガポールの言語環境と華語社会
 - 9章 シンガポールの近代化・経済開発と国家語の英語化
 - 10章 シンガポールの都市行政
- 第 部 スラマ・マレーシア
 - 地理学者の見たマレーシア・シンガポール
- あとがき

各部には編者の解説がそれぞれ付けられ、各部を構成する論文に対する適切な解説がなされている。

第 1 部は、1980年代から90年代にかけて、著者が行なったマレーシア・シンガポールの華人社会に関する調査成果を踏まえた論文で構成されている。それぞれが独立した論文として書かれていたため、各章の系統性に欠けるところもあるが、本書のタイトルにもなっている第 1 章の「華人社会研究の視点」を押さえておけば、それぞれの論考は容易に理解できる。この論考は著者の研究視点の中核をなすもので、華僑と華人の用語の区別を明確化する必要性を説き、固定化した「華僑」観が、変動する東南アジアの複合社会を理解するのに妨げになっていることを指摘している。華僑の特色とされる商才や経済的成功が安易に民族性と結び付けられることに反対し、商才や経済的成功は華僑以外の世界各地で人種・民族の枠を越えて見られる一般的な傾向であることを指摘している。

著者はここではシンガポールとマレーシアの華語教育と華文学の動向を通して、両国の華人社会の変容を分析している。シンガポールでは華人が主流派であるが、マレーシアでは少数派である。しかし、言語の一元化では共通している。シンガポールでは英語が第一言語、プミプトラ政策が進展するマレーシアではマレー語が第一言語となり、華語はいずれの国でも第二言語の地位に落ち、華文学もまた衰退の状態に陥っている共通点を鋭く指摘している。

第 2 章では現地調査に基づく両国の学校教育における華語教育の現状、華語とマスメディア、華語と産業の発展、国家文化の在り方について幅広く論じ、両国における差異の拡大を明らかにしている。評者がとりわけ興味を持ったのは、華語の高等教育機関の問題である。著者は自ら客員教授として教壇に立ったことがある華語の高等教育機関であった南洋大学の消滅についても論及し、シンガポールがもはや中国人中心の国ではなく、多民族から成る英語系シンガポール人の国になった

ひとつの証しと、冷静に分析している。この南洋大学の消滅はマレーシア華人の進学にも大きな影響を与えることになり、マレーシアでは80年代に華語の高等教育機関、独立大学の設置運動が政治運動として再展開された。著者の「華語系シンガポール人は華語を失ってもナショナルアイデンティティに動揺はほとんどなく、華語系マレーシア人は自分たちの言葉を失うと、どの社会に帰属するかの自己確認のすべがなくなる危機に瀕している」との指摘は示唆に富む。マレーシアにおける華人の華語教育擁護運動の激しさには、著者が指摘しているようなアイデンティティ・クライシスが根底にある。

第 3 章では両国の華語社会の将来を論じている。もともとはマラヤという一体感のあった地域が1965年二つの異なる国家に分離した結果、同質であった華人社会は別々の道を歩むことになり、多数派と少数派という置かれた環境が伝統文化・言語に対する華人の対応に差異が生じたと著者は分析している。華語への執着を急速に失うシンガポール華人社会、少数派であるが故に、華語をエスニシティ確立のためのシンボルとするマレーシア華人社会。著者は両者の差異を見事に分析している。

第 4 章では華人のエスニックアイデンティティについて論じている。ここでも引き続き、シンガポールとマレーシアの華人にはそれぞれ民族意識・国民意識の差異が生まれ、「シンガポール華人は上から与えられたエスニシティを受け入れ、マレーシア華人は下から噴き出したエスニシティを守ろうとしている」と分析されている。この章には十年前に評者とともに現地で行なった華人意識調査の分析結果が反映されている。

第 5 章は太田氏の専門外である馬華文学について論じている。馬華文学とは中国の五四運動の影響を受けて、マラヤと呼ばれていたシンガポール・マレーシアに生まれた華語文学を指す。著者はこの両国ではかつて一体化していた馬華文学もそれぞれの国の置かれている言語環境や文化政策によって大きく変化していると説く。シンガポー

ルでは英語教育の進展によって衰退し、マレーシアでは華語教育への危機感のためか、抵抗文学としての戦闘性を持っていると指摘している。また、太田氏は日本の馬華文学研究者が陥りやすい華人への感情移入や思い入れといった立場を取らないがゆえに、馬華文学の将来や少数派の言語問題に対して、かなり忌憚のない意見を述べている。評者の知る限りその姿勢は現地の馬華作家との意見交流の場においても変わらなかった。例えば、「華人の人権主張と華語のために、華文学を象徴として全面に押し出す考えが、馬華文学の停滞を打破することに有効であるとの保証はどこにもない。むしろ、媒体言語の多様化を通じて、南洋華人は自らが求める文化を他の民族に普及させ、新たな発展をはかる時期に来ているのではなかろうか」との提言もそうである。馬華文学が停滞を打破できないまま今日に到っている現状を見ると、太田氏のこの鋭い指摘と主張は、いまなお有効性を持っているように思われる。しかしながら、最近の中国と東南アジア華人社会との関係強化の動きのなかで、馬華作家たちは、中国大陸との連携(中華文化ネットワークの構築)を深めながら、中華文化の象徴としての馬華文学を押し出している傾向にある。

第一部では第6章で都市国家シンガポールの都市計画、人口政策、住宅開発の成功が有能で独裁的な指導者リー・クワン・ユーを中心とした無敵のPAP政権によって実現したものであると肯定的に論じている。一方、そこには「中央集権化された権力こそが、今日のシンガポールをつくることを可能にしたのかどうか」という疑問も著者には生まれている。これと関連した論文としては第10章があげられる。この章では住宅政策、交通政策を焦点にあてて、シンガポールの特色ある行政について論じている。行き届いた住宅政策、整備された都市交通を中心に、とかく欧米からの批判のある厳しい行政指導、公務員の汚職防止、市民への管理行政について論じ、これらの管理行政がシンガポールに経済繁栄をもたらしたとしている。

第7章ではシンガポール工業化のシンボルとなったジュロン工業団地と近辺のHDBと呼ばれる住宅団地の民族構成について論じている。第7章は四度にわたる現地調査を基にまとめたもので、著者にとってシンガポール研究の出発点となった論文である。工業活動とそれにかかわる生活環境という視点から、工業団地の発展と民族混合の実態を明らかにしたものとして評価できよう。太田氏はこの調査を切っ掛けにし、シンガポールの多民族国家における言語文化政策への関心を深め、研究領域を拓げていったと推測される。

第8章は80年代前半、シンガポールとマレーシアの華人社会をめぐる言語環境を初めて考察したもので、部に収録された各論考の前段階の研究にあたるものといってよい。ここで、書かれている内容は、評者がすでに行なった研究と重なる部分があり、異なる視点での研究成果に大いに刺激されたことはいうまでもない。

第9章はシンガポールの近代化に果たした英語教育を論じたものであり、シンガポール実用的な言語政策を近代化と国民統合との関わりで論じている。国家語としての英語化には成功したが、シンガポリアンのアイデンティティを民族別の言語に求める多文化主義がどこまで英語と調和できるのかという指摘は、示唆に富む。英語化は華人の行動様式や思考に西欧化をもたらし、昨年シンガポール国立大学の社会学者が行なった社会調査で「もし、生まれ変われるなら、アメリカ人や日本人になりたい」と答えた華人青年が20%もいたことが、大きな話題になっている。少数派のマレー系やインド系のほとんどがマレー人、インド人と答えたのとは対照的な結果であった。

第二部は前者の研究論文とは異なり、約三十年前に書かれたシンガポール、マレーシアに関する紀行文である。太田氏の両地を旅行した経験を基にまとめられている。1960年代後半のシンガポール・マレーシアの状況が描きだされ、今日の両国のはげしい変容ぶりとの比較ができる。ここに収められた紀行文からも、著者の観察力の鋭さや真摯な研究姿勢が随所に窺える。著者は紀行文のな

かで提起していた疑問点や問題点を、その後も一貫して持ち続け、その成果は後の研究論文や著作に反映されている。乗り合いタクシー、屋台を中心とする外食経済、禁欲的なマレー人の生活、サバ州の先住民族の観察、華人の中国観など、今でも参考になる記述が多くある。太田氏は海外を旅する多くの日本人が手に取る旅行案内書『地球の歩き方 マレーシア』にも長年執筆されたことがあり、太田氏の鋭い観察力に裏づけされた「案内」によって、現地への理解を深めた旅行者もかなりいたはずである。

太田氏は地理学者という専門領域を越えた言語文化論、民族論研究の立場から東南アジア華人社会、とりわけシンガポール・マレーシアの華人社会を見事なまでに、妥協を許さない厳格な研究姿勢で調査分析され、高いレベルの研究業績を残された。評者は現地調査や国内での共同研究会を通じた短い付き合いであったが、太田氏の研究と教

育に対する厳しさと優しさを学んだ。そして現地での調査や研究交流の場においても、理路整然と主張を述べ、問題点をまとめあげていく研究姿勢は、評者の研究活動にとっても、貴重な財産となっている。

さて、この遺作集以外に、太田氏の代表作としては、病魔と闘いながら病床でまとめられた『国語を使わない国 シンガポール』（古今書院 1994年）があげられる。タイトルのユニークさに見られるように、多民族国家シンガポールの言語・文化政策を通じたシンガポールに関する優れた研究書である。また、もう一つの遺作集である『地域の姿が見える研究』（古今書院 1997年）にも、太田氏の研究姿勢と教育姿勢、観察力、視点が理解できるエッセイ、書評、辛口の批評文などが、集められている。東南アジアの華人社会、エスニック問題、移民問題、地理学などに関心ある人々や学生、院生、研究者の皆さんに、本書含めた三冊の太田氏の労作を一読されることをお勧めしたい。

（Hirofumi Ogi, 本学部教授）